

海と地球を 守っています

01

次世代の子供たちにきれいいで 豊かな海をつなげるために 中條慎也

さん

海守会員番号・360002141

中條慎也(ちゅうじょう・しんや)

1957年香川県生まれ。高松第一高等学校を卒業後、家業を継いで仏壇店を経営。本業の他に高齢者専用賃貸住宅などを運営する(株)T・P取締役統括、老人介護施設NPO法人ハイ・フォー・ステーション理事長、男木水仙郷をつくる会事務局長など多彩な顔を持ち、地元地域の為に取り組んでいる。2008年から「海守さぬき会」会長として、瀬戸内海の環境保全活動に力を入れている。

さぬき会のメンバーは、漁師や樹木医、英語教師にメディア関係など多種多様な職業の人で構成されている。そんな彼らを結束させる理由ともいえる共通した思いがある。それは郷土愛である。

「故郷の海が好きで、自分たちの手でそれを守りたい」

その強い思いがさぬき会の原動力と

なり、地元の海岸清掃だけにとどまらず、さまざまな活動を行っている

「海守さぬき会」。発足当初から海岸清掃だけにとどまらず、さまざまな活動を展開。中でも会長を務める中條さんは、海底堆積ゴミを一掃する回収システムの構築に力を入れて行政をも動かしてきた。すべては、生まれ育った地域の為の一端を担いたいという思いからスタートした。



さぬき会を 結束させる郷土愛

「海守の活動を外から見ているのではなく、自分たちでも何かできることをやっていきたかった」

海守さぬき会を発足させた理由を聞かれ、さぬき会会长・中條慎也さんはこう応えた。中條さんの本業は仏壇店の2代目。本業のほかに老人介護・障害福祉施設を運営しながらNPO法人などさまざまな社会貢献活動に参加し、地域の為に懲りたましく動き回り尽力している。海守会員の友人に誘われて海守に入会したのは平成19年11月。入会して半年後、それぞれに違うボランティア活動をしていた地元メンバーが徐々に集まり、「海守さぬき会」が誕生した。

さぬき会のメンバーは、漁師や樹木医、英語教師にメディア関係など多種多様な職業の人で構成されている。そんな彼らを結束させる理由ともいえる共通した思いがある。それは郷土愛である。

ゴミ問題は、漂着ゴミ、漂流ゴミ、堆積ゴミの大きく3つに分かれる。漂着ゴミと漂流ゴミは、海外などの外洋から海流に乗って運ばれてきたゴミが問題になっている堆積ゴミは、河川を経由して沈んでいる堆積ゴミは、河川を経由して

僕らがやらなくて、 だれがやるのか

海洋環境に悪影響を与えていたる海ゴミ問題は、漂着ゴミ、漂流ゴミ、堆積ゴミの大きさく3つに分かれる。漂着ゴミと漂流ゴミは、海外などの外洋から海流に乗って運ばれてきたゴミが問題になっている堆積ゴミは、河川を経由して沈んでいる堆積ゴミは、河川を経由して

に沈んでいる堆積ゴミの酷さがわかつてきました。瀬戸内海の堆積ゴミが海の動植物の環境破壊に影響を与えているのではないかという疑問まで抱きはじめました」

「漂着ゴミを掃除している中で、海に沈んでいる堆積ゴミの酷さがわかつてきました。瀬戸内海の堆積ゴミが海の動植物の環境破壊に影響を与えているのではないかという疑問まで抱きはじめました」

さぬき会のある香川県は、本州、四国及び九州に挟まれた瀬戸内海に面し、小豆島をはじめ約110余りの島々が点在する。そこには、穏やかで風光明媚な光景が広がっている。しかし、そんな美しい景色とは裏腹に、大きな問題がそこには潜んでいた。

「漂着ゴミを掃除している中で、海に沈んでいる堆積ゴミの酷さがわかつてきました。瀬戸内海の堆積ゴミが海の動植物の環境破壊に影響を与えているのではないかという疑問まで抱きはじめました」

なった。

木島、男木島の4漁業協同組合から協

力を得て、数日間に亘って漁業中に網

に引っかかる堆積ゴミを回収する試

みを実施した。回収したゴミは4tコ

ンテナ2杯分。缶、瓶、ペットボトル、自

転車、洗濯機、タイヤなど生活の中か

ら流れ出た家庭ゴミがどんどん海底か

ら引き上げられた。今まで目にすること

のなかつた堆積ゴミの実態に参加者

たちも驚きを隠せなかったという。



さぬき会は子供たちへの環境学習にも力を入れている。授業の一環として実際に子供たちを船に乗せて、底曳網に魚と一緒にゴミがかかる様子を見せており、子供たちに海の現状を見せて、ポイ捨てや不法投棄など自然環境へゴミを出さない社会へと繋がりたいと願っている。



故郷の海を守るために 必要なことを やっているだけ

投棄したゴミが大半を占めている。つ

まり、周辺地域から出た生活ゴミである。瀬戸内海に沈んでいるゴミの総量

は回収可能な分だけでも1万3千トンと推計されている。

「この堆積ゴミの問題は自分たちのためではなく、次世代の子供たちにきれいで豊かな海をつなげるためにも今やるべきではない！」

こうした現実を知ったさぬき会は、平成21年から堆積ゴミの回収に取り組みだした。過去にこの問題に取り組んできた人はいない。行政をはじめ誰も手を付けていなかつた問題だった。目に見えないことでそんなに騒ぐことはない、と多くの人は見て見ぬ振りをした。しかし、さぬき会は違つた。地元

の海が汚れていく姿を黙つて見ていることはできなかつたのである。

とはいえ、少人数のボランティア団体に何ができるのか。中條さん

を筆頭にメンバーたちは、堆積ゴミ問題を解決するために、まずは漁師さんたちにその協力をお願いすることにした。底曳網にかかつたゴミを海へは戻さずに、そのまま持ち帰つてもらうこ

とを思いついたのである。

「はじめはやはり大変でしたよ。堆積ゴミを取る作業は面倒な事だし、その目的がなかなか理解されませんでした」

漁師にとって網に引つかつたゴミを持ち帰ることは、そう簡単なことではなかつた。漁船に乗せて持ち帰つたゴミ

は、処分するのにも事業ゴミとみなされて費用がかかる。また、拾つたゴミを分別する手間など漁師にとっては余計な負担も大きい。協力してくれる漁師さんたちに、いつまでも甘えているわけにはいかない。ゴミを排出する人と片付ける人が異なる現実。一つの事業としてはやく展開していかなければ…そんな焦りがあつた。

堆積ゴミが漁場の環境破壊につながり、豊かな海を保つためにも堆積ゴミの回収がどうしても必要だと、それを、多くの人々に根気強く説明してまわつた。そして平成21年、ようやくその努力が実を結び、NPO法人「瀬戸内オリーブ基金」と共に「海底ゴミ目に見える化計画」が実施されることに

なった。この展示会を機に、県に海ゴミ回収の事業化と助成を打診。その活動が実を結び香川県環境管理課を動かした。香川県水産課も、県下の各漁協側と交渉し、堆積ゴミ除去に向けた活動に取り組みはじめた。市民活動と行政。バラバラだった歯車がさぬき会の地道な活動がきっかけとなり、ようやく一歩となつて動き出したわけである。

「瀬戸内海を守るために、やはり

その周りに住んでいる人じやなきや

守れないでしょ。私は、故郷の海を守るために必要なことをやつていただけです」

今、中條さんたちさぬき会では、香川県の漁場を豊かにするために、周辺の山に目を向けて、新たな取り組みをはじめている。

地元のきれいな海を次世代へと残すためにさぬき会の活動はこれからも続く。一つの活動が形になると、また新しい発想で新しい活動が生まれる。自分の性格を中條さんはカツオだと言つた。

カツオは泳ぐのをやめたら死んでしまう。自らの活動をカツオの生き様と重ね、その故郷を思う途切れるこのない情熱を、さぬき会の活動へと注ぎ続けている。

などの場所を借りて、今まで行つてきた活動を展示紹介するというものだ。「海底ゴミ目に見える化計画」に続き、そのユニークな名称は、少しでも多くの人に知つてもらいたいという気持ちの表れでもある。